とある胎児の―

人間科学科2年　林　裕介

僕は胎児です。今は、お母さんのお腹の中にいます。あともう少しで破水ってところです。お母さんとお父さんの、大事な大事な愛の結晶。自分で言うのは少々照れます。けれども、僕は感じるのです。お腹の外から伝わってくる、愛情ってやつを。暖かくて、ふんわりしていて、とても甘いのです。こんな気持ちを沢山注いでもらっている僕は、本当に贅沢者でしょう。

けれども、僕には悩みがあります。それは…。少し恥ずかしいですが…。しょうがない、言ってしまいましょう。笑わないで聞いて下さい。

僕がこのまま何事もなく、無事に産まれる事ができたとしましょう。問題はその後。ある特殊な体質を持って、この世に生を受けてしまうのです。「一生小便が止まることなく、常に排泄し続ける」いう、特殊な体質を。考えてもみて下さい。一生小便が止まる事なく、常に排泄し続ける…なんて惨めなのでしょう。まだ幼児期は我慢できるでしょうが、小学生・中学生になったときを想像すると、それだけで嗚咽が漏れてきます。きっと友達は一人もできないでしょう。恋なんて論外。珍獣扱いされて、異性なんてよってこないに決まっています。考えるだけで憂鬱です。日本国憲法の三大原則の一つに、「基本的人権の尊重」なんてのがありますが、果たしてこんな僕が、人並みの生活を送っていけるでしょうか。多分、いや、きっと無理でしょう。残念です。僕は、腹の中にいながらにして、これから排出されるであろう新しい世界に、早くも絶望していたのです。

いつしか僕は、ある二文字で、頭が埋め尽くされるようになりました。私はこう見えて、腹の中にいながらにして大体一億九千九百九十九万九千九百九十九もの命を背負っていますが、こうなっては仕方がないでしょう。しかし、外の世界では、随分医学が発展していると聞いています。また、外に出てからでは、親の監視も厳しくなるでしょう。よって、腹の中にいるうちに、その二文字を決行することにしたのです。

まず僕は、両手で思いっきり、臍の緒を握りしめることにしました。お母さんと僕とをつなぐ、命の綱。その中を流れる血液を止めてしまえば、容易く絶命できると思ったのです。しかし、駄目でした。僕みたいな小さな存在が否定できるほど、血流は弱くはありませんでした。皮肉なことに、それに触れたことで、一つの命の逞しさを再認識してしまいました。なんとも情けない。

次に、握り拳を作り、それを口腔に放り込んでみました。これで息ができなくなれば、ものの二・三分で窒息死できると思ったのです。…僕は馬鹿でした。口に手を突っ込んで気付いたのです。僕、口で呼吸してないや、と。酸素は全て、腹に凛々しく突き刺さる、この臍の緒から供給されているのです。この作戦も、ただ体力を無駄に消耗しただけで終わってしまったのです。また臍の緒にしてやられました。

僕は途方にくれました。このままでは、昇天することができないではないか。どうしてくれようか。すると、驚くべき事が起きました。私に強引に送られてくる血液のなかの栄養分が、みるみる減少していったのです。僕は閃きました。僕が悩むと、きっと母親の調子が悪くなる

のだろう。それから僕は、悟りを開く前の仏陀のように、沈思黙考しました。何日も何日も、考え続けました。しかし頭の中は、仏陀のそれとは大違い。毎日毎日、人を殺して殺して殺したのです。刺したり撃ったり潰したり曳いたり…。ある時は、水道水に毒をまぜ、またある時は、人間を大根おろしのように、下し金で摩り下ろしました。一番楽しかったのは、人間ボーリングです。何もない広大な土地に、何十人何百人と人間を埋め込むのです。ただ首だけを出して。老若男女の首が、産毛のように生えている様は、それこそ圧巻でした。そして、そこに重さ二トン程の鉄球を、ゴロゴロゴロと転がしました。人の頭が、次々に潰されていきます。「プチッ」と潰れる頭もあれば、「ブチュッ」といって潰れる頭もあります。一番印象に残っているのは、「ゴギャンチュー」といって真っ平らになった、小さな女の子の頭です。

意外とこのような妄想も面白いものです。そんなこんなで、赤い液体に含まれる栄養素も、そろそろゼロに近くなってきました。僕は「やっと死ねる」と、とても安らかな気持ちでした。まぁその気持ちも、あっと言う間に裏切られてしまったのですが。お母さんは、僕の思惑通り、体調が芳しくないという事だったので、お父さんに連れられて病院へ行きました。腹の中から、「医者の野郎も手の施しようがないだろう」と、高を括っていましたが、そこはさすが二十一世紀。何やらキラリと光る、細長い物をお母さんの腕に刺したと思った瞬間、僕の体に沢山の栄養が流れ込んできました。そんなこんなで、またしても僕の計画は失敗に終わってしまったのです。

それからの僕は、もうヤケクソでした。いつでもどこでも、お母さんの腹を、内側から蹴りまくってやりました。腹から飛び出る位の勢いで、四六時中蹴りまくったのです。蹴られた拍子に驚いて、階段などから転げ落ちてしまうのを期待したのです。けれども、これさえ大失敗でした。僕が蹴りをいれる度に、「お父さん、またお腹を蹴ったわ」「本当に元気な子だな。早く抱いてみたいよ」などと、喜びに満ち溢れた声が腹腔に響きわたるのでした。

ここまでして、やっと僕は諦める事ができました。素直に生を頂戴することにしたのです。ただし、ただ生きるのではありません。母に父に、思う存分小便をぶっかけてやります。そうでもしなければ、僕の気は治まりません。僕は、一生暴れまわってやります。僕を馬鹿にする奴、否定する奴に、小便をかけ続けます。嫌がる奴には、口にねじ込んでやります。どうせ変人扱いされるのです。変人扱いされる男が、今ここで正真正銘の変人になってしまって、何がいけないのでしょうか。いいえ、いけなくなんてありません。

話は変わりますが、私はよく、とても不思議な夢を見ます。僕が色々な生き物になり、できたばかりの地球を泳いだり、走ったりしている夢。数え切れない程の動物になり、その中には今まで見たことのないような姿もありました。そんな時は自分が自分では無くなってしまう気がして、無性に恐ろしかったです。今思うととても滑稽ですが、夢の中ではどんなに有り得ない状況でも、心の底から感情を抱くものです。そして、脈々と進化を続けたその夢の最後、私は人の形をしていました。世界にもみくちゃにされた男でした。妙に生活感に溢れた世界の中、二十億四千九百八十四万秒生きたところで、車に轢かれて死んでしまいました。「ゴギャンチュー」と車に轢かれて死んでしまいました。

思うに昨日の夢は、私の存在をこの世へ送り出した何者かが見せたのではないでしょうか。生きる喜びでも感じれば、希望を持って生きていくのではないかという希望でも持っていたに相違ありません。私は言います。ならば何故こ

のような体質にしたのか、と。お前にも小便をぶっ掛けてやるぞ、と。このように私の心に一陣の生臭い風が吹いたその時、私は自分が思う以上にこの境遇にショックを受けていたことを知りました。

おおっと、そんなこんなで、そろそろ産まれなくてはいけないようです。もう少しお話をしたかったのですが、致し方ないでしょう。そういえば、産まれた瞬間に全ての記憶が飛んでしまうのでしたっけ。確かそうだったような…せっかくあっちで「日本国憲法の三大原則」とか、色々勉強したのに、もったいない気がします。って、さっきの自分の決意も忘れてしまうわけですか。そうですか、そうですか。尚更生きる気持ちが無くなりました。まぁ「尚更生きる気持ちが無くなりました。」なんて気持ちも、忘れてしまうのでしょうけれど。それではそろそろ行ってきますか。

また、次、逢いましょう。